数詞にみられる意味拡張
―経験的基盤が言語に反映されることの一例―

高水　徹
京都大学
e-mail: ttaka@mal.seikyou.ne.jp

1. はじめに

本稿では数詞というトピックを扱うが，その中でどのような主張を行うかということに言及する前に，混乱を避けるため，本稿で扱う数詞とはいかなるものであるかを説明する必要があるだろう。ここで扱う数詞とは，従来は数詞の一部分をなす数詞語幹とされることもあった（宮地（1972: 75）を参照）部分，つまりそのような場合における「数詞語幹＋助数詞」から助数詞を除いた部分のことである。例えば，「1 人」，「3 台」における「1」，「3」がこれに当たる。単純に数を表わす部分に数詞という用語を使うのは，数詞という名称がわかりやすいからという便宜上の理由に加えて，概念の側から言語のカテゴリーを規定するという立場から，ここでいう数詞をみたいからである[1]。もし統語的側面についても言及するなら，数詞という用語を数を表わす部分に用いることは，「詞」と「辞」の区別をしていないという点で混乱をまねく恐れがあるが，本稿での議論は統語的側面には関与しない。つまり，数の概念を含む言語表現の意味が本稿での考察対象である。

以上のように規定された数詞，あるいは数詞を含む言語表現は，他の言語表現と同等に，言語表現としての地位を備えている。例えば，次のような指摘がある。

> Numeral systems are in clear ways well integrated with the languages in which they are embedded. In the stream of speech, numerals receive no special attention, making use of the same phonological units (say phonemes) and processes (phonological rules) as the rest of the language. (Hurford 1987: 5)

上記の引用で指摘されている音韻的側面に加えて，どのように意味拡張がなされるか，またその結果どのような形で慣用化されるか，などをみれば，数詞が全く「言語的」であることがわかる。この，数詞が他の言語表現と同じように言語的である，ということが，本稿の主要な主張の 1 つ目である。

もしこの主張が認められるなら，次に問題となるのは，数詞がどのように動機づけられているかである。なぜなら，他の言語表現に関して認知言語学のアプローチで行なわれているように，言語表現に動機づけが与えられるなら，たとえ数であってもその例外となるとは考えにくいからである。この点は，一般に数に対して抱かれている印象，すなわち論理的で演算というシンボル操作と最も結びついたもの，というものとはかなり異なっている。ただし，シンボル操作が不可能だということを主張しているのではない。本稿での 2 つ目の主張は，現代の我々の文化において，数は確かに高度なシンボル操作の対象となっているが，数詞が根源的には完全にシンボル的なわけではなく，身体的動機づけをもっているということであ

---

[1] ただし，このカテゴリーに関しては，名詞や動詞において問題となるような意味での規定に関する議論は不要であり，その点で，それらとは異なり形式的に規定できる。

© 高水　徹, *数詞にみられる意味拡張*.
言語科学論集 第 5 号（1999）pp. 75–87.

る。

2. 数と身体性

日常生活の中では，特に意識されることなく様々な認知が行なわれている。道を歩く際であれ，何かを持ち上げる際であれ，五感を通した知覚，そこから得た情報を元にした推論，思考，判断など，広い意味での認知が常に行なわれている[2]。これらを可能にするのは「身体性を反映するより包括的な認知能力」（山梨1999）である。言語を使用する際も，その例外ではない。言語も，そのような能力の現れとして形成されたものと考えられ，したがって数の概念，あるいは言語表現としての数詞も，そのような意味での認知に規定されている。

> Our unconscious conceptual system functions like a "hidden hand" that shapes how we conceptualize all aspects of our experience. (Lakoff and Johnson (1999: 13))

この「見えざる手」，すなわち身体性の反映としての認知によって我々が制約を受けているならば，その制約が言語に反映されていると考えるのは，自然なことである。

では身体的，経験的な動機づけとして，数詞の場合には具体的にどのようなものが考えられるのか。このセクションでいくつか取り上げる例は，直接的に身体が関わっているようなものである。そのような例は，現代社会においてシンボル操作に適した 10 進法が圧倒的に普及している中で減少しつつあるが，何らかの形でその形跡を今に残しているものもある。

松本（1999）によれば，世界には五進法，二十進法に基づいた数詞をもつ言語が数多く見られる[3]。簡単にまとめると，

1. 「5」と「10」を表わす数詞がそれぞれ「手」と「両手」に由来する言語が多い。
2. それらの数詞に対する足し算，引き算が組み合わされる。
3. そのような言語において「20」以上からは「20」がベースになることが多い。「20」はチュクチ語，エスキモー語では「人間」の意味（「5」はそれぞれ「手」「腕」に由来）
4. チュクチ語の「10」を表わす数詞は「両手」を意味し，ティンリン語（ニューカレドニア南部）の「20」を表わす数詞は「一人分」，「40」は「二人分」をそれぞれ意味する。

ということになる。「5」と「手」，「10」と「両手」，「20」と「人間」の結びつきは，言うまでもなく指の数に起因している。そうであるならば，指を使って数えるという具体的な行為に基づいて数詞が作られた，より正確には，慣用化され，定着した，と言うことができる[4]。もちろん，「20」の場合に足の指も折りながら数えた，ということを主張しているのではない。数えるという日常的な行為の中で，何が自然な単位として用いられ，言語に現れるに至ったか，という点が重要である。

このような観点からさらに言えるのは，例えば，「5」に直接的に「手」が表われていなく

---

[2] このような広い意味での認知については，Lakoff and Johnson（1999）を参照。

[3] 数体系自体が五進法や二十進法であるわけではない点に注意が必要である。数体系ではなく，数詞の中に，五進法や二十進法的体系に基づくものがある，ということである。

[4] 泉井（1978: 266）は，「昔から人間の手足に10本の指があるかぎり，<10>は『人間的に自然な』数である」と述べている。

ても，「5」が数詞の体系のベースになっていれば，身体的基盤に基づいた数詞体系であると言ってよいだろう，ということである。そこまで強い主張をしないとしても，何らかの形で手の存在が含意されている場合，日常経験から，数の体系が身体的基盤に基づいていると考えるのは極めて自然である。Heine（1999: 23）は，アビ語の話者が，6から9の数詞において，「新しい」という形態素によって手の存在が含意されているために，手の概念を表現する必要がないと述べている。

数字の中にも，上記のような身体性が反映されたものがある。漢数字やローマ数字にみられるイコン性が，その例である。

(1)　一，二，三
(2)　I, II, III, IV, V, VI, VII, VIII, IX, X, ...

これらの例における「1」から「3」では，数と棒（ストローク）の数が一致しており，その点でイコン的であるが，特に（2）では文字において，五進数に足し算，引き算を加味した形が表われていることが注目に値するだろう[5]。いずれにしても，個物と数詞の直接的対応から，外界とのやりとりが経験を通して言語に反映されている，と言うことができる。

このように，数詞や数字の中には，身体的基盤をみることができる。このことは，身体経験的な言語の動機づけが，話者にとって明らかであるということを意味しない。たとえ現代の話者にとってそれがわからなくなっているとしても，動機づけが存在し，それに基づき慣用化され，定着したという事実に変わりはないからである。

3. 数詞の意味拡張の具体的事例

以下では，数詞を含む言語現象の具体例をみる。単に数詞を含む言語現象を取り上げるのではなく，意味拡張，ないしその結果としての慣用化を含んでいると考えられる事例を取り上げることにより，数詞にも我々の認知が反映されていることの証拠としたい。以下の例において，具体から抽象へ（ここでは量から質へ），という拡張の方向性がみられる点をあらかじめ指摘しておきたい。これは認知言語学においていろいろな形で報告されているテーゼの1つである。

3.1. 数詞1を含むもの

数詞 1 を含む表現には，数詞が他の言語カテゴリーに劣らず言語的であり，認知を反映しているというここでの主張を証拠立ててくれる例が特に豊富に存在する。このことには，1という概念が際立って個物と結びついたものとなりやすい，ということが大きく関与していると考えられる。日常の言語使用において，1 が表わしている概念は，1000 が表わしている概念よりも，より何らかの個物と結びついていることが多い。この際の個物は，具体性をもったモノである必要は必ずしもなく，抽象的なものであっても構わない。その抽象性に関わらず，1000 の個物 1 つ 1 つが非常に想起されにくいのに対して，1 つの個物は容易に想起でき

---

[5] McPherson（1999: 183）によれば，バビロニアの数字にも同じ現象がみられ，この直接的な対応関係が数えることを容易にしている点を指摘している。泉井（1978: 208）は別の観点から，「低次の数詞にはそれ自体においても，おのずから具体的な即物性，または応物性ともいうべき性質がつよくまといついている」としている。

るし，個物が実際に想起されることは，小さい数，特に 1 の場合に顕著である。まずは「文字通り」の 1 により近い，より具体性をもったもの，順に抽象化され，量のドメインから質のドメインへの移行がみられるものを提示する。

3.1.1. 少量性を数詞「1」が担うもの

最初に，数詞と結びついた概念が数そのものではなく，何らかの量であるものをみる。

(3) 一言
(4) 一を聞いて十を知る
(5) 一笑に付す
(6) 一過性
(7) 一考

(3) は，実際に何らかの 1 つの言語的単位（単語など）であることはめったになく，短いコメントなどに用いられる。「1」が，1 であるという具体性をやや失い，量の少なさを表わすという抽象化を受けている。ただし，この場合の量とは，コメントの量という抽象的なものである。(4) は情報量の少なさが 1 で，そこから引き出される情報（例えば教訓など）の多さが 10 で表わされることによって，対比が生まれている。これらの例において測られている量は抽象的ではあるものの，まだ具体的な量とのメタファー的関係が比較的近い。しかしながら (5) から (7) においては，1 が時間的な短さ，一時性，あるいは程度の低さを表わしている点で，そのドメインはさらに抽象的な時間のドメインであり，具体的な量 1 をプロトタイプとしたときの距離はさらに離れたと言うことができる[6]。

次のような例は，さらに複雑な説明が必要である。

(8) 身一つで来る
(9) 塵一つ落ちていない
(10) 挨拶一つ満足にできない（この3つは『大辞林』より）

(8) の場合には「だけ」と，(9)，(10) の場合には「さえ」と意味が近い。これらの例において，「身・塵・挨拶」が 1 つであるわけでも，量が少ないわけでもない。関係しているのは，量ではなく，むしろ程度であると考えられるが，それを示すためにはスケールを用いた説明が有用である。(8) では，「身一つ」ではない状態で来るのが自然であるにも関わらず，身体以外のものを伴わずに来た，ということが意図されている[7]。「人が一人来る」というイベントには最低 1 つの参与項（人）が必要であるが，複数の参与項（持ち物など）が含まれる場合には，それらの地位が対等ではないのが普通である。イベントの成立のために，その人本人（の身体）は，最低限必要なものであり，その人が持ってくる荷物などは，余剰的なものである。この参与項の必要性に基づくスケールの最低ラインのみが満たされている，

---

[6] 「一考」については，「短い時間考える」ことから「ちょっと考えてみる」ことへの語用論的強化が起こったと考えることができるだろう。

[7] 実際には服を着ているだろうし，財布くらいは持っているであろうが，そのような誇張が含まれていることは無視しても議論の本筋に影響はない。

ということを，ここでの「1」は表わしている。(9)，(10) に関しては，「汚さのスケール」，「能力のスケール」をそれぞれ考えることができ，その最低の事例は 1 つ（あるいは少量）の塵，挨拶をすること，などであるが，それらさえ存在しない，ということが表わされている。

もちろん，これらのスケールは客観的なものではなく，2 つ目以降の序列がはっきりしていなくても構わないし，2 つ目以降の事例が不明確であることさえ許容されるような，主観的なものである。しかしながら，「1」に修飾される部分が最低の事例ととらえられている点で，これらの例に共通性がみられる。(8) と (10) では，少量性というある程度の具体性を残している (9) とは違って，事例がスケールにおいて最低ラインであることが「1」によって示されており，量から程度へ，つまり具体から抽象へとドメインが移行したと考えられる。言い換えれば，(9) は均質なもの同士をスケールに配置しているのに対し，(8) と (10) では，ある視点からのみスケール上に配置できるような事例が取り上げられている。この点でこれらの例の方がより主観的であると言える。

3.1.2. 全体，単一性，同一性を数詞「1」が担うもの

数詞「1」は，一番目の基数であり，数えるという行為は普通は 1 から始められる[8]。また，それゆえ我々の日常生活において，数詞「1」や，それに対応する概念は極めて頻繁に用いられる。この 2 つの理由により，「1」の概念が基本単位としてとらえられるのは，自然なことである。この何かを測る基本単位としての数詞「1」（とそれに対応する概念）は，上でみた例における，量を表わす「1」と明確に区別できるものではないが，以下にみる事例における「1」が何らかの全体，あるいは到達点という観点を含んでいることによって，それらとは部分的な対比をなす。

(11)　〇〇 |一家／一門／一派|　（〇〇は任意の固有名）
(12)　一夏（ひとなつ）

(11) では，構成員をもつ集合が統一体であることが，「一」によって表わされている。(12) では，「一（ひと）」が後にみる不定性を表わしていると考えることも可能だが，「夏の間中」という意味で使用することも可能であり，ここで考えているのは後者の方である。どちらにおいても，「一」が隣接する言語形式の概念の中には，さらに小さな単位としての個物または何らかのより小さな区切られた領域（bounded region …… Langacker (1991a: Chap. 3)）を考えることができるが（これらにおいては，一門に属する人々や，一夏に含まれる日々），これらがまとまったもの（集合体）としてプロファイルされている点が重要である。

(13)　一つ所
(14)　一定
(15)　画一
(16)　一心に

---

[8] 10 から 20 までの素数を数える，というような場合でも，11 が 1 つ目の素数であることには変わりがない。また，5 から数えるというような場合は，1 から 4 の続きとしての 5 からなのであり，行為自体が本質的に異なっているわけではない。

これらは，「1」が同一性を表わしている例である。（13），（14）は，空間的，時間的広がりという面が強調されているので，先にみた一時性の例と，全く反対の概念と結びついているようにみえる。つまり，先にみた例では，時間を含む量的な限定ないし少量性が「1」によって表わされていたのに対し，これらの例では空間，時間の継続性が表わされていることが，一見矛盾しているようにとらえられるかもしれない。しかし，これらにはそれぞれ視点の違いが反映されているのであり，それぞれの視点からは十分な動機づけが考えられるのである。（16）は心に変化がないことを同一性を意味する「1」によって示すことで，メトニミー的に一途であることを示していると言うことができるだろう。だとすれば，この現象も一種の拡張であるということができる。

3.1.3. 基本単位としての認定と評価

「1」には数の概念，あるいは量の概念以外にも，基本単位という側面があるということを先にみたが，さらに，基本単位としての認定や評価が関わってくるような言語事例が存在する。

（17） 一人前（料理ではなく成熟度）
（18） 一端（いっぱし）
（19） ひとかど

これらにおける「1」は，文体的な差異や，使用頻度の違いはあるものの，いずれも成熟したものとして認められる状態であることを表わしている。「1」を基本単位としてとらえる観点から，これらの言語現象の背後には，「成熟している＝基本単位として認定できる」という動機づけが考えられる。基本単位に達していると言うことによって，メタファー的に成熟した状態であることを表現している。あるいは別の言い方をすれば，存在としての可能な形態「1」に達しているというメタファーである。メタレベルの議論として，存在が存在としてとらえられることと，1つの個物がそのようにとらえられることの類似性（ある種のカテゴリー化が機能しているという意味で）が指摘できるだろう。

（17）から（19）が評価の点において肯定的であるのに対して，以下のものは否定的である。

（20） 一仕事，一苦労

これらにおいては，上の例とは対照的に，「基本単位に達してしまった」こと，さらに「それを否定的に評価している」ということが含意されていると考えられる。つまり，大したことがないと予想していたにもかかわらず，仕事や苦労としての基本単位に，量的あるいは質的に達してしまった，ということがメタファー的に表現されている。

3.1.4. 不定性を数詞が担うもの……不特定な１つの事例であることを示しているもの

ここまでにみてきたものが数えるという行為や対象のとらえ方と強く関連していたのに対し，ここでみるものはさらに抽象度が高いものである。

(21)　一案，一因，一員，一部，一角（いっかく），一夜，ひところ

これらにおける「いち」あるいは「ひと」は，不定性を表わしており，英語の one day における one と似ている。これらの例のほとんどにおいて，「1」は不定性のみならず，「取るに足らない」というような矮小性を意味することもできる。特に以下の例ではその傾向が強い。

(22)　一兵卒，一市民，一介の

これらの例において「1」または「1」を含む単位が修飾する対象が人間であることが，そのような慣用化を促進させたのかもしれない。

この点にはさらなる検討が必要であるにせよ，不定性と矮小性の関係に注目すべきである。対象が不定であるという心理的評価と，対象が取るに足らないものであるという心理的評価には，メトニミー的なつながりがある。なぜなら，不定の何かとは特に評価する必要のないものであり，それは評価という文脈においてどちらかというと否定の方によっているものだからである。

3.1.5. 例示的な意味を持っているもの

さらに，上記の不定性と密接に関わる概念として，例示を「1」が担っているものがある。

(23)　一日一善
(24)　一日一回

ここで問題にしているのは，「一日」の方の「1」である。この例における「1」は，不特定の対象（この場合「日」）を取り出していると考えることができる。この点は 3.1.4 でみた事例と共通しているが，「どの不特定の日に関しても，一善」ということである。「に」の省略であるというように，単に「一日」の部分が頻度を表わしていると考えることもできるが，そうすると他の数詞ではこのような慣用表現がないという，「1」の特殊性がとらえられなくなる。すなわち，なぜ (24) が可能なのに対して「*二日一回」が不可能であるかが説明できないのである。

このような「1」が例示の機能をもっているというとらえ方は，Langacker（1991b）による each の意味のとらえ方と類似しているだろう。

(25)　Every nation has economic difficulties.
(26)　Each nation has economic difficulties. (*ibid.*: 111)

彼は「every がマークする名詞の事例 ι_i は，T の代表的事例として解釈されるので，それに帰属された特性は全てのメンバーについて成り立つ。」（*ibid.*: 112）とし，さらに each と every の違いについて，reference mass R_T が最大の外延の集合ではなく，その同定される部分であるとしている（*ibid.*: 114）。例えば，

(27)　Every tiger has stripes.
(28)　Each tiger has stripes. (*ibid.*: 114)

後者に関して，特定の限定されたトラの集合が調べられ，その中の全てについて，しま模様をもっていることが成り立っている，と述べている。ただし，限定された集合の中の不特定な例を取り出すという部分が類似しているのであり，each と「1」が分布や意味の点で対応しているというわけではない。

この「一日一善タイプ」と同じような意味（と形式）を英語で担うのが，anotherを用いた次のような例にみられる構文である。

(29) Another day, another dilemma
(30) Another Day, Another Dollar
(31) <<sigh>> Another month, another column.
(32) Another day another problem
(33) Another day, another idea

これらにおいては，ある特定の日の次の日になれば，ある特定の事物や現象の次の事例が起こったり出現したりする，という意味が構文によって担われており，ここでみている「1」と同様に例示的である，と言うことができる。

3.1.6. 序数的な概念の慣用化

以上のものに関しては，数の概念からの拡張であると考えてきたが，それとはやや異なるのが序数の概念に関わる例である。これらは本稿の中心的なトピックとはやや関連が薄いが，主観的スケールが導入される点や，やはり「1」に偏った分布を示す点で，全く無関係とは言えないので，一応触れておく必要があるだろう。

(34) 一にも二にも
(35) 一も二も無く

(34) には重要なもの，あるいは考慮すべきもののスケールを考えることができる。そのスケール上で特に強調すべきものに関して，その事例が一番目も二番目も占める（したがって，他のものよりもはるかに重要である），と述べることによって，強い際立ちを表わしている。(35) を序数と関わりのある例とすることは意外に思えるかもしれないが，同様に考慮すべきもののスケールが考えられるので，ここに含めた。そのスケール上の手順を踏んでから次の行動に移っても不思議はないような状況において，そのような手続きを踏まずに即座に次の行動に移った，という動機づけがもともとあったと考えられる。

3.2. 2以上の小さい数詞を含むもの

先に述べたような広義の認知と深く関わるような概念ほど，拡張や慣用化を受けやすいと考えることができるが，数に関する言語現象でその例と言えるのが，先にみた「1」を含む小さな数である。例えば，数詞の屈折を取り上げてみよう。

In many inflecting languages (for example, Latin, Russian, Welsh, Ancient Greek) the first few numeral words inflect, that is take various somewhat different forms, agreeing in gender or case

> as conditioned by their syntactic environment. This is true for words up to 3 or 4, after which invariant (or in Russian case, less variant) forms are used.（Hurford 1987: 52）

このような言語現象を支えるのが，我々の日常生活における，小さな数と大きな数への接し方の差異である。

> ...one can think of many everyday situations in which the difference between a low number and its successor is more important than the difference between a high number and its successor.（*ibid.*: 92）

Hurfordはケーキを焼くときなどの日常的文脈では，卵が2個か3個，あるいは8個か9個という場合に，前者の差異の方が大きいと述べている。

だが，それにも関わらず，数詞 2，3，4 などの小さな数に対して，小さい数で少量性を表わしたり，低い程度を表わしたりというような意味での慣用化は，「1」の場合や，次節でみる10の場合ほど起こらない。この事実は，以下で述べることによるのかもしれない。つまり，3 それ自体が安定したものとしてとらえられているので，言語的な慣用化や拡張とは違う意味での慣用化の方が優勢になるという考え方である。

ここで取り上げるような慣用化，つまり，より言語的な慣用化に対するのが，宗教や故事などに基づく慣用化，文化的慣用化であり，このような慣用化により，3を含む語彙が増えていると思われる。以下では，数は少ないながら，2 以上の小さな数が言語的に慣用化，あるいは拡張している例をみる。

(36)　三々五々

この例は非常にイコン性が高いものの，やはり点在している集合が 3 や 5 以外の数でも少人数であれば構わない，という点で「1」と同様の拡張がみられる。これに対して，

(37)　再三

では，「再」が「2」を表わしていると考えられ，それゆえ「再三」のいわゆる文字通りの意味は「2，3」であるが，もちろん「何度も」という意味の熟語である。「2」あるいは「3」単独ではそのような「多い」意味になるとは考えにくいので，「2」「3」が共にあり，それらが共に同一の事象の回数を表わしているという二つの要因が機能している，と考えられるだろう。

「多い数」としてより適当なのは，次のようなものだろう。

(38)　七転八倒，七転び八起き

(38) において 7 や 8 が「たくさん」を表わしていることは，特に不思議なことではない。なぜなら，日常的文脈の中で，特にこの例のように回数に関して，7 回や 8 回何かが起こる場合，その回数は多いと考えられるからである。ただし，同じ「8」であっても，次のものは違う考え方をした方が良いだろう。

(39) 八方塞がり
(40) 八つ当たり

(39) に関してはまず「八方」が慣用化された単位として存在し，その全てが塞がるということは日常経験においては全方向が塞がっているに等しいことから，「全て」という意味に拡張したと考えるのが自然である。(40) に関してもほぼ同様に考えられる[9]。同じ点で抽象度が高いのが次の

(41) 八つ裂き

である。なぜなら，(41) を用いるための条件として，対象が正確に 8 つに裂かれている必要はなく，ある程度以上細かい小片に分解されていれば，8 以上でも以下でも構わないからである。

(42) 十人十色

(42) は変わった例で，いろいろな観点から考察できるが，ここでは不特定な集団から 10 個のサンプルを取り出し，それらについて述べている，というモデルを考える。そのような場合，日常的には，10 個のサンプルがバラバラな属性をもっていれば，集団全体がバラバラである，という推論がなされる。

このような言語的な慣用化と対比されるのが，文化的な慣用化である。実際，数詞に関わる慣用化の例として，後者の方が先に思い浮かべられることが多いだろう。その中で特に多いのが 3 を含む例である。定延 (1998) の「魔法の数 (マジカル・ナンバー) ・3」という考え方は，この点をとらえたものである。彼は人間が 3 という数を「完全な数」としてとらえがちであることを示すため，『史記』，『老子』などの例，おちつき，ピタゴラス学派によるとらえかた，「大・中・小」「上・中・下」など，いろいろな文献からの例を挙げ，「なぜ人間は，3 という数に『完全な数』という印象をいだきがちなのだろうか？」と述べる。さらに，「いわゆる数字言葉」は 3 に関係するものが多い (3 K，3 高，3 種の神器など) こと，集合の要素が3以上になってはじめて指せる語彙が豊富に存在する (皆さん，全員，全部，だれ，どれ，一斉に，一切など) ことを指摘する。

このことを説明するために用いられているのが，スキャニング仮説である。

(43) スキャニング仮説 1

a. 参照値内在型で，互いに異なった要素の集合なら，1つ目の要素には属性が付与されず，2 つ目の要素から属性が付与される。
b. その他の場合，(つまり (i) 参照値内在型で，同じような要素の集合の場合，そして (ii) 参照値外在型の場合，さらに (iii) 参照値がない場合) は，1 つ目の要素から属性が付与される。

---

9 「八つ当たり」について，例えば「広辞苑 (第 4 版) 」では「誰彼の区別なく八方へ当たり散らすこと」と定義しているので，それに従いこの例における「八つ」が方角を指すとした。

「たくさんある」という認知は，異なる属性が要素に 2 つ以上付与されるとき，つまり互いに異なった要素が3つ以上あるときになされる。3 は「多様な世界イメージをもたらす，最小の，人間にとって最も身近な数である」（同書:76）としている。これは一見，3によって「たくさん」が表わされている，つまり本稿での主張と完全に矛盾するようにみえるが，そうではなく，どちらかというと 3 で完成されたひとまとまりが表わされる点に関しての仮説である点に注意しなければならない。したがってこの仮説によって扱われるべき現象と本稿で扱っている現象を区別する必要があるのである。

3.3. 大きな 10^n の数詞を含むもの[10]

以下に示す例は，百，千，万を含む例であるが，日常的に十進数を用いている我々にとってこれらの数詞が「1」とは意味合いが違うもののやはり基本的な単位であること，また，その事実に基づいていると思われる慣用化，拡張の現象がみられることに注意したい[11]。

3.3.1. それらの数詞が数の多いことを表わすもの

以下に挙げるのは，10^nが文字通りの数ではなく，「多い」という意味を表わすものである。実際にはその数より少なくても構わないし，その方が自然な例も多い。

(44) 百間長屋
(45) 千客，巨万
(46) 万巻の書
(47) 千成り
(48) 千里眼
(49) ｛千／万｝に一つ，千載一遇
(50) 一騎当千
(51) 百科，百貨店
(52) 百芸に通じる，百害あって一利なし
(53) 万（よろず）
(54) 百も承知

(44) から (49) と比較して，(50) から (53) は単純な量というよりも質的ドメインでの多様性が表わされている。(48) は，「千里」に関して「千」が大きな数を表わしており，それほど遠くを見ることができることが，常人には見えないものを見ることができるという特殊な能力を表わすというメタファーを含んでいる。(50) から (52) は次節でみるものとの境界であると思われる。つまり，これらにおける数詞が多様性に言及していると言うこともできる。(53) に関しても（少なくとも現代では）同様だろう。

(54) は，数詞を含む表現によって「非常によく」という副詞的概念を表わしている。

---

[10] n は自然数である。以下も同様。

[11] 英語やドイツ語において，「千」や「百」を用いて「多数」を表わす際に，それらが文法的に複数の形態をとることは，これらの用法を数詞としての普通の用法から区別している。

3.3.2. 単に数の多いことではなく「全て」を表わすもの

次の例における数詞「万」は，単に大きな数ではなく，全てという意味を表わしている。

(55)　万国，万人
(56)　万能，万有引力

これらにおいて「万」が「ばん」と読まれる点で，普通の数詞として用いられるときと音韻的にも区別されている。さらに，ここに挙げた例が全て「万」であることに表われているように，このような慣用化は一般的ではない。概念的にも，「多い」と「全て」は視点がかなり異なり，後者の場合は全体集合が意識されている。だが，少なくとも，日常的な場面においては，万という単位に達すれば，それが全てを意味することが多い，ということも指摘できる。

3.3.3. 多様性という質的側面にまで言及しているもの

10^n によって多い数が表わされている拡張を先にみたが，ここではそのような量的なドメイン内ではなく，質的なドメインへと意味が機能する場所が移っているものを取り上げる。

(57)　百花繚乱，百鬼夜行
(58)　百計をめぐらす
(59)　嵯八百
(60)　千差万別

これらにおいて数詞は「いろいろ」という多様性を表わしており，その点で 3. 3. 1. でみたものとは区別されるが，両者が全く別物であるのではない。数が多いことは多くの場合質的な多様性を伴う。ここでみている拡張はそのように動機づけられていると考えられるのである。

恐らくこの分類の境界には異論もあろうが，その事実はこれらの用例における意味がグレイディエンスをなしていることを示している。

4. 結論および展望

数は，一般的には客観的，シンボル的なものであると考えられている。もちろん数にはそのような側面があり，ごく日常的にシンボル操作の対象となっているのだが，それと同時に，数が言語の中でどのように機能しているかを観察すれば，それ以外の側面も有していることが明らかになる。本稿では，言語表現としての数が，他の言語表現と同様，拡張，慣用化において動機づけをもったものであり，また，その動機づけが経験的なものであるということを示した。

中でも「1」は言語的な拡張を最も成し遂げており，それは我々の数えるという行為において「1」がとりたてて具体的であり，基本的であるという事実と関連すると考えられる。3 節でみた慣用化のいくつかは，まさに「1」が基本単位であるということによって動機づけられていると考えなければ説明がつかないほど多様なものである。

10^n という日常の生活文脈においては大きな数詞の意味拡張においても，認知言語学で一般的に認められている傾向，量から質への方向性をみることができた。その際，量と質の間に

は量が増えると一般的に質が多様になるという相関が存在する。この相関が，10ⁿ が「いろいろ」という意味に拡張することを動機づけている。

客観的には正しいわけではないが，日常的，経験的にはほぼ正しいと言っても差し支えのないようなこと，例えば 10 個のサンプルを観察することによって全体が推論できること，に基づいている慣用化により，言語における数詞も，言語である以上我々の経験と独立には存在し得ないということが示されている。まさにこの点で，数詞は他の言語表現と何ら変わりがないのである。

参考文献

泉井久之助 1978. 『印欧語における数の現象』, 東京: 大修館書店.

Heine, Bernd. 1999. *Cognitive Foundations of Grammar.* New York: Oxford University Press.

Hurford, James R. 1987. *Language and Number: The Emergence of a Cognitive System.* Oxford: Basil Blackwell Ltd.

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things.* Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他（訳）『認知意味論』, 紀伊国屋書店, 1993)

Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By.* Chicago: The University of Chicago Press. (渡辺昇一 他（訳）『レトリックと人生』, 大修館書店, 1986)

Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh.* New York: Basic Books, A Member of the Perseus Books Group.

Langacker, Ronald W. 1991a. *Concept, Image, and Symbol.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 1991b. *Foundations of Cognitive Grammar.* Vol. 2, Stanford: Stanford University Press.

松本克己 1999. 「世界言語の数詞体系とその普遍的基盤」, 『言語』, Vol. 28, No. 10, pp. 22 - 29.

McPherson, Leslie Margaret Perrin. 1999. "Scientific Theories That Unconceal Being: Intensions and Conceptions in Their Genesis." in Jackendoff, Ray, Paul Bloom, and Karen Wynn (eds.) *Language, Logic, and Concepts*, pp. 161 – 220, Cambridge: MIT Press.

宮地敦子 1972. 「数詞の諸問題」, 『品詞別日本語講座 2　名詞・代名詞』, pp. 55 – 78, 東京: 明治書院.

高水　徹 1999. 「日本語の量・程度表現に関する認知言語学的分析」京都大学, 人間・環境学研究科, 修士論文.

定延利之 1998. 『言語表現に表れるスキャニングの研究』, 京都大学, 博士論文.

山梨正明 1999. 「言葉と意味の身体性－認知言語学からの眺望－」, 『現象学年報』, pp. 7 – 21, 日本現象学会.